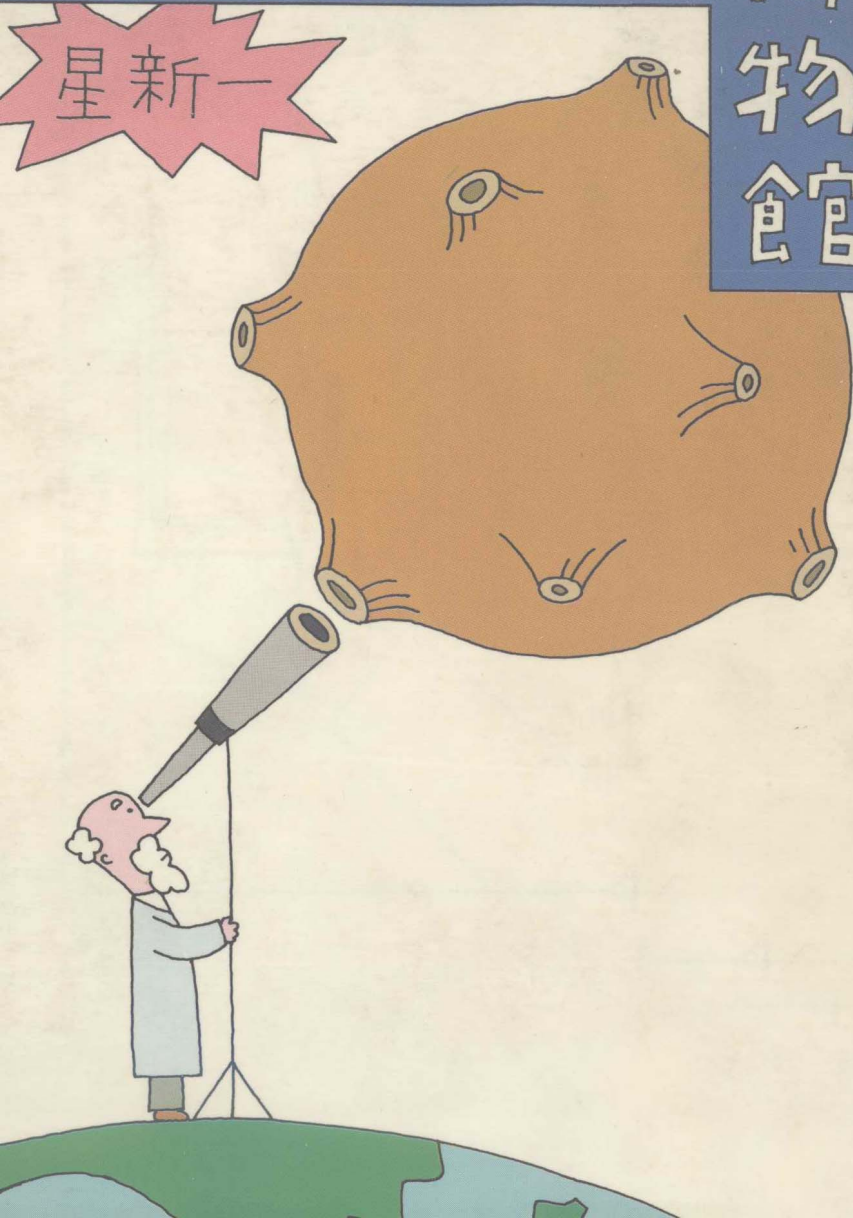


できないところない博

物館

星新一



でき々こない博物館
星新一



できそこない博物館 はくぶかん

昭和五十四年六月十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 星 ほし 新一 しんいち

発行者 徳間 康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

電話 東京 (三三) 六二二一 番 (代表)

振替 東京 四一四 四三九二 番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えます)

編集担当 菅原善雄

印刷・図書印刷物 製本・大口製本印刷物

©1979 Shinichi Hoshi Printed in Japan

7980

てきそこない博物館／目次

物体など	5
テレビシーなど	24
暗殺など	45
現象など	65
酔っぱらいなど	86
時代物など	107
記憶など	128
スペース・オペラなど	150
薬など	172
ておくれなど	194
地下鉄など	216
意識など	240

装幀・本文イラスト／和田 誠

てきそこない博物館

物体など

発見されたそれは、まさに正体不明の物体だった。

科学者たちがよってたかって検討したが、なんのために作られたものか、ぜんぜんわからない。

形はといえば、前方がふくれあがったナメクジといったところ。長さは約一メートル半。太さは中央部の直径が三十センチくらい。外側は金属製。といっても、無数の金属片から成っている。こまかなウロコでおおわれているといった感じ。

ところどころに透明な部分がある。しかし、そのちよつと奥は灰色で、内部がどうなっているのかを知ることができない。

「分解してみるか」

当然のことながら、そんな意見も出るが、不採用。へたにいじって爆発でもしたら、ことだ。また、分解のやり方がまずかったら故障状態になり、機能が停止してしまうかもしれない。

機能。問題はそこなのだ。なにかのために作られたものにちがいない。事実、周囲の人たちに対し、微妙な動き方をするのである。人たちの声に対してか、物音に対してか、動作、体温、そういったなにかにに応じて動く。その統計をとろうとしたが、これといった結論は出ない。

内部がかなり精巧であることは想像できる。だから、なおのこと機能をこわしてしまいたくないのだ。金属片のウロコを一枚、引っぱったぐらいでははがれそうにないし、はがすことが破壊へつながることだってある。

その物体から、そう不快な印象は受けない。とてつもなく役に立つ品のように思える。しかし、その用途はいっこうにわからないとくる。

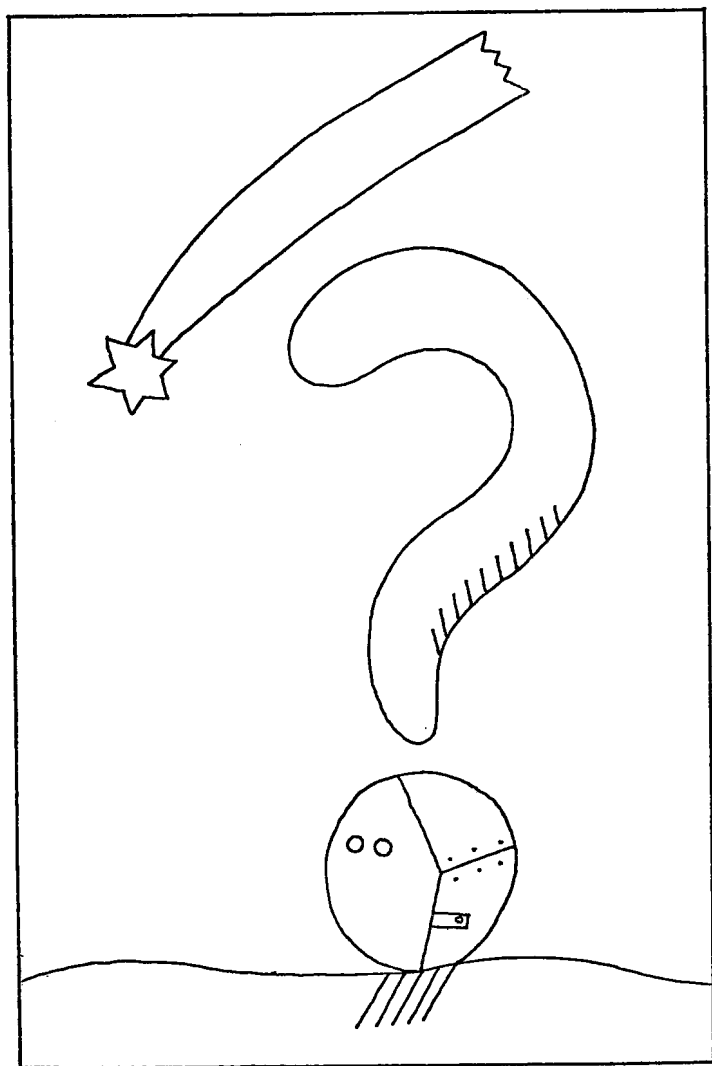
さまざまな議論がなされるが、みなをうなずかせるにはいたらない。極度にむずかしい知恵の輪を持たされたような気分のように、日時がたつてゆく。そもそも、これはなんなのだ。

やがて、なぞのとける日がきた。

つまり、所有者があらわれたのだ。人類ではない。宇宙人である。その時、人びとは同じような言葉をつぶやく。

「そうか。知的生命というものは、自分の姿に似せてロボットを作るのだな」

ある短編SFの要約のように思われるだろうが、こんな作品を読んだ人はいないはずである。つまり、これは私の創作メモだからだ。二十年ちかく、書こう書こうとしながら、どうしてもう



まく仕上がり、今日におよんでしまったという、幻の作品である。

昭和三十四年ごろだったろう。当時、いまはなき宝石社で「宝石」と「ヒッチコック・マガジン」の二誌が発行されており、私は、その両誌に毎号、短い作品を書いていた。

などという、いかにも流行作家みたいだが、そのほかの雑誌からはぜんぜん注文がなかったのだから、早くいえば月に二編というわけである。

のんびりとしたものだったが、そのころから、つぎのアイデアはどうしようという不安に、いつもつきまとわれていた。現在までずっとそうである。これも職業。人生とは、なにかもうまくいくようには出来ていない。

参考のための資料として書いておくが、当時の原稿料は四百字一枚が百円だった。それに、源泉で二割が引かれた。つまり、手取り八十円である。それに、作品は一編が十数枚とくる。夢と希望があり、まだ若く独身だったから、つづけられたのだらう。

また、自分の原稿が活字になるということは、とにかくうれしい気分、私はそれに熱中した。原稿料については、私はあっさりしている。最初のころは掲載されることが楽しかったし、現在、シートシート集だから印税が入ってくるのだと考え、不満はない。しかし、一時期、PR誌を相手に、かなりの高額をふっかけたことはあった。殺人は困る、家庭不和は困ると、あれこれ制約の多いのにたまりかねてだ。それでも、たいてい適当なところで妥協していた。

何人かの評論家が「シートシート」の原稿料は特別あつかいすべきだ」という文章を書き、ありがたい声援だったが、いまだに、そうしてくれている雑誌はないようである。この道の後輩のために、私が断固として主張すべきかもしれないと考えることもあるが、あまりその気になれ

ない。

もし、そうなったとする。傑作を書かなくてはならないとの責任から、心理的な重圧を感じ、かえってよくないのではなからうか。体験からの感想である。

これが自分のなっとくのゆく作品だ。いいか悪いかは、編集部なり読者なり、そちらでおきめ下さい。そのほうが気楽である。水準に達していれば、本にして売れ、原稿料で割りの合わないかたぶんは、そこで取りかえせるのだ。

なんで、こんな金銭の話になってしまったのか。

その、月に二編のベースの時期に、さっきの宇宙人のロボットの話を思いついた。悪くないアイデアだ。しかし、作品にするからには、くふうがいるな。どんなぐあいに趣向をこらしたものか……。

などと考えているうちに、べつなアイデアも出てくる。いじっているうちに、そっちがなんとかまとまり、くらべてみると、少しいいようだ。

まあ、いい、これだけ骨組みはできているのだ。締切りが迫ってどうしようもなく、せっぱつまった時に活用すればいいさ。

それで二十年がたってしまったのだから、われながら、ふしぎである。かなり深刻にせっぱつまった場合もあったのだが、これは作品にならなかった。なぜ仕上がらなかったのだらう。検討してみる価値はありそうだ。

第一に、その形状である。かりにナメクジとしておいたが、ヘビ型でもいい。昆虫のクモのは

うが、あるいは効果的かもしれない。しかし、タコ型にするとウェルズの火星人を連想され、結末を感じられるおそれがある。いろいろ考えるべき点が多いのだ。

本来なら、地球上にない形の生物を考え出せば理想的なのだが、これが意外とむずかしい。やってやれないこともないと思うが、描写が多くなるし、あまりぶきみなものにしては、ストーリーとのバランスが崩れる。

つぎに、大きさの問題。もつと小型にしたほうがいいか、巨大なものにしたほうがいいか。どの程度が適当なのだろう……。

ここまで書いてきて、このアイデアのひらめいた、もうひとつ前の段階を思い出した。そもそもは、オモチャの人形である。

すばらしくよくできた、お人形。子供がそれを拾い、ひとりで遊んでいる。どんなしくみかわからないが、電池の切れることなく、歩いたり、飛びはねたりするのである。しかし、ある夜、それと同じ大きさの宇宙人がやってきて、連れて帰る。つまり、そのロボットだったのである。

こんなことを思いついたのは、幼年時代にぬいぐるみのクマのオモチャと遊んだことと関連があるのだろう。

それはともかく、人形でまとめれば、容易にできあがっただろう。しかし、私は平凡なような気がした。読んではいけないが、すでに書かれていそうでもある。

もうひとひねりしようとし、そのうち、聖書にある「神は自分の姿に似せて人を作り」の言葉を盛りこもうとした。どうやら、この欲を出したことが、ことをやっかいにした原因らしい。

しかし、いまあげた二つのほかに、さまざまな問題がからんでいる。

どこで発見するかの点もある。宇宙空間にするか、他の惑星上にするか、地球上にするか。まず、毎回いじりはじめるたびに、その選択に迷ったものだ。

また、発見から、宇宙人が来てなぞが解決するまでの期間を、どの程度にするか。読者に「むりして作り上げたな」と感じさせないようにしなければならぬ。

何回もいじっているうちに、いい方法を思いついた。おくり物とするのである。宇宙からおくられてきた品。しかし、それはなぞの物体。やがて、宇宙人が来て、

「どうです、便利なものでしょう」

人びとは、あっと驚く。

この段階で、一気に作品になっていてよかったはずである。しかし、そうならなかった。たぶん、べつなアイデアのが出来てしまったのだろう。

そもそも、アイデアとは異質なものを結びつけるところから発生する。この場合、もとをただせば、宇宙人とロボットである。それプラスなにかが、作品というしろものだ。

しかし、SFとはやっかいな分野だと、つくづく思う。

アシモフの作った、ロボットの三原則なるものがある。人間への服従、非反抗、自己保全だ。もっともなことだと、私も賛成だ。しかし、それは所有者が人間の場合である。

宇宙人のロボットはどうだろう。分解しようとしたら、自己保全の原則が発揮される。その宇宙人とはタイプのちがう人間が相手なら、どうなるだろう。殺しまわることだってやりかねない。いま、はじめて気がついた。作品に仕上げよう仕上げようしながら、なぜ簡単にいかなかったのかは、無意識のうちにロボット三原則を気にしていたのである。そうわかって、少しさっぱ

りした。

奇妙な外見の宇宙人が、同型のその物体を連れ、人びとのうなずきをあとに、飛び去ってゆく。そのラストシーンを書きたくてならなかったのだが、現実には私の手にはおえない問題だったのだ。こだわりすぎた。結末から作品を作るのは、私の性格に合っていない。よく人から、

「結末を先に考えるのですか」

と聞かれるが、そんなことはないのだ。

あるいは、このストーリー、なにかうまく仕上げる方法があるのかもしれないが、ことこれに関しては、私の取り組み方が固定してしまっていて、打開できそうにない。このへんで、いさぎよくあきらめよう。

*

ほかの作家だってたぶん同じだろうが、私にとって短編をひとつ書くのは、大変な作業である。これだけ書いてきたのに、いまだにこつがわからない。まことに原始的な方法をとっている。

意欲にあふれて机にむかうことなど、まるでない。いやいやながらであり、頭はからっぽである。しかし、しなければならぬ。みずから選んだ道なのだ。

そこでどうするかというと、机の上の二百字詰め原稿用紙を裏がえしにしてひろげる。むかしは、四百字詰めのを半分に切って使った。つまり、大きめの白いメモ用紙。

そこへ、思いつくまま、なにかを書く。

わき出る泉のように、つぎつぎと字になってくれれば申しぶんないのだが、世の中、そううま

くはいかないようになっている。

太宰治は、飛んでいるチョウを追いまわし、やっと何匹かつかまえるといった形容をしている。もっとも、太宰の場合は短い語句であり、私の求めるのはある種のシチュエーション、つまり状況である。異様な出だし。

この段階が最も苦しい。無から有を取り出すのだから、当然だろう。しかし、なにかしら出てくるのだから、ふしぎである。どうなっているのか、説明のしようがない。

私はヒトコマ漫画でしか知らないが、精神分析医は患者を長椅子に横たえ、

「さあ、心に浮かんだことを、なんでもいいから口にして下さい。他人には決してもらしませんから」

と話しかけるらしい。だれだって、なにかしらは頭に浮かぶものである。

私は自分自身でそれをやり、メモ用紙の各所に、ちょこちょこした書きこみができる。小さな字である。しかし、たいいていの場合、役に立ちそうにないものばかり。われながらいやになり、書斎のなかを歩きまわったり、テレビをつけてちょっと見て消したり、書棚から本を出してのぞいたりする。ありもしないなにかをさがしているかっこうだ。第三者が見たら、まさしく時間の浪費。

また机に戻り、なにか書きこむ。小さな字で書くのは、それらの優劣を比較しやすいからである。ただそれだけの理由だが、私にとっては重要である。ひとつの癖と片づけることもできようが。

それらを検討するが、どうもものになりそうにない。そんな時はあきらめて、風呂へ入って酒

を飲み、軽い内容の本を読んで寝ることにしている。ついに一日をむだにしたかと思ひながら。そういった瞬間に、少しましなアイデアが頭に浮かんたりするのだから、これまたふしぎだ。アルキメデスが風呂のなかで、ニュートンはリンゴの實の落ちるのを見て、法則を発見したという。

しかし、それは考え抜いたあげく、緊張と解放感のほどよいバランスのとれた状態だったのだろう。こんな精神状態を人工的に作れば、アイデア発生薬となる。いつの日か、出現するのはなからうか。

さて、メモ用紙に思いつきのいくつか書きこまれた。使える兵隊は、これしか集まらないのだ。どこでその見切りをつけるかがデリケートだが、長いあいだの経験といったところか。それに締切りもあることだし。

そして、つぎは選択である。どれが、ミスター・アイデアになりうるかである。ものになりそうなのはどれかの検討。一見よさそうだが、うまくストーリーに展開しないものもある。ぱっとしないのが、メーキャップによって意外にいい形にまとまることもある。

この段階になると、無意識によってではなく、過去の読書体験による意識しての作業である。くわしいことは、いずれそのうち。

よし、これでいくか。私はメモからその部分を切り抜き、短編への仕上げにかかる。

というわけで、あとには、一部分の欠けたメモ用紙が残る。年月とともに、それがふえてゆく。もちろん、アイデアが出なくてしょうがない時、じつはそのほうが多いのだが、それらの古いメモをひっかき回すこともある。